

「地域が支える命の授業」～NHKウィークエンド東北より～

事務局 中保 良子

7月1日(土)午前7時30分から放送されたNHK総合テレビ「ウィークエンド東北」(東北6県で放送)で、当会の青少年のための出前講座「命と心の授業」が紹介されました。東日本大震災がきっかけで実施に至った事業ですが、実は、当会では10年以上も前から青少年への「死の準備教育」の必要性を感じ、実施への道筋を模索してきました。最近になってようやく軌道にのってきたところであり、テレビ番組では授業の視点や支援者の思い、地域とのつながりにフォーカスを当てて取り組みが紹介されました。放送では詳しく紹介されることのなかった内容なども含めまとめました。

学校の授業として「命の授業」を実施するという事は、単にゲストティーチャーとして医師や看護師が出向いて講話をするということではありません。授業のカリキュラムの中での単元の選択、学年ごとの理解力に合わせた内容・表現の吟味、授業時間・形式の工夫など、学校側との事前の打ち合わせの負担が大きく、コンセンサス(目的や意義・成果の合意)を得ることが大変難しいということが、実施への高いハードルとなっています。それゆえ、単発授業としては実施できても、継続あるいは数多くの学校での実施につなげることは非常に難しい事業といえます。

事業を進めるに際して東日本大震災時の学校と地域の協力体制にヒントを得て、学校教育の中に入り込むのではなく社会教育とのコラボレーションで行うことが実施への近道ではないかと考え手探り状態で準備を始めました。最初に実施した増田中学校のある名取市では、増田公民館の建物が被災し使用不可能になり地域の方々交流と学びの場を失ってしまいました。その場を提供してくれたのが増田中学校でした。学校側から何か地域と中学生が連携できる取り組みがないかと相談され、以前から構想していた地域の方々と一緒に考える「命と心の授業」を提案し実現に至りました。当時、増田中学校の体育館は避難所としてたくさんの方々避難生活を送っていましたが、すでに通常生活を送る市街地の人々との間に温度差があり、生徒から避難所で暮らす方々に向けて心無い言葉が出ることもありました。学校側がそのことに心を痛めていたことが、「命と心の授業」実施の追い風になったと思います。

授業は、地域の方を含むグループワーク形式の体験学習と医師や看護師の講話の二部構成とし、体験や会話の中から「命の大切さ」や「思いやりの心」を育む内容を企画しました。

平成24年度から名取市立みどり台中学校でも「ココロふれあい講座」を実施することができ、今年度から実行委員会を立ち上げ、さらに地域との連携を強めることで継続を図っています。平成26年度から実施している聖和学園高等学校の看護系コースの生徒のための授業では、医師や看護師から命の最期を支える医療や福祉社会の取り組みなどについて講話をいただき、将来の夢への支援を行っています。番組放送後、仙台市や名取市、他の市町村の中学校からも少しずつ依頼が増えてきました。

学校教育と社会教育が結びつくことで、地域の多世代間のコミュニケーションが良好になり

ます。高齢者の方々が新しい担い手として活躍することは健康寿命を延ばし、知識や経験を地域に還元することになり、地域の活性化や青少年健全育成にもつながっていきます。「地域が支える命の授業」は様々な波及効果をもたらしていくのではないのでしょうか。

「命と心の授業」実施効果とねらい

- 人の様々な生き方と価値観に触れることができる
普段あまり交流のない地域の方々と会話を通してコミュニケーションがとれる
- 貴重な授業に取り組めた成功体験をつくる
通常の授業では体験できない貴重な機会にしっかり取り組めたことは、生徒にとって大きな成功体験であり、自信につながる。
- 自分の考えを大切にさせる
思春期である生徒たちは、自分や周りの人達に否定的であるが、グループワークを通じて相手の意見を聞きそれぞれの考えを尊重することを学ぶことができる
- 一人の人間の一生を大切に思う
誕生から老いや死という人生を辿って考える時間を持つことで、一人の命の重さをかみしめ、自分や他の一人一人の命を大事にする心を育む